

平穩死の

穏やかに最期を 迎えるために すすすめ



東京都世田谷区立特別養護老人ホーム
芦花ホーム 医師

石飛 幸三
先生

講師

〈プロフィール〉

特別養護老人ホーム・芦花ホーム常勤医。1935年広島県生まれ。61年慶應義塾大学医学部卒業。同大学外科学教室に入局後、ドイツのフェルディナント・ザウアーブルッフ記念病院、東京済生会中央病院にて消化器外科医、血管外科医として勤務する一方、慶應義塾大学医学部兼任講師として血管外傷を講義。癌、脳梗塞と闘って、老衰への医療のあり方を考え始め、東京済生会中央病院副院長を経て、2005年12月より現職に転職して約10年。
著書に「『平穩死』のすすすめ 口から食べられなくなったらどうしますか?」、「『平穩死』という選択」、「『平穩死』を迎えるレッスン」、「『平穩死』という生き方」などがある。

「平穩死」の意味

われわれは、人生最期の迎え方について、今までになく考えなければならない時に来ています。日本は世界一の長寿社会になりました。延命治療は次々と開発されます。自分の最期の迎え方を選ぶはずなのに、どこまで延命処置を受けなければならないのか判らなくなっています。

我々は老いて衰えて最期は自分の口で食べなくなります。実はこれは身体が生きていることを終える証なのです。最終章での必要な水分や栄養の量はどんどん減っていきます。死ぬのだからもう要らないのです。入れない方がむしろ穏やかに逝けるのです。

多くの人は人生の最終章が来たら、病院で管だらけになって死ぬのは嫌だと言います。しかし親や連れ合いの最期が来ると、救急車を呼んで病院に送ります。点滴や経管栄養（胃瘻）をして、頑張らせなければならないのでしょうか。反って苦しめることにならないのでしょうか。

我々は自然の摂理を無視して、医療に過剰な期待をしているのではないのでしょうか。今改めて医療のあり方を考えなければならないのです。“一人しか居ない私のお母さん、どんな姿でもよい、いつまでもこの世に居て欲しい”というあの家族の感情、その思いはわからないではありません。しかし本当は理性的な問題なのです。家族自身が、何が親のためになるかを考えるべきです。何れは自分の番が回って来ます。一人一人が自分の問題としてとらえ自律すべきです。老衰という自然の摂理を認識し、医療は本来人のための科学であることに戻り、最終章における医療の役割、介護の使命を認識する時です。私が作った「平穩死」という言葉の意味は、単なる延命治療が意味をなさないのであれば、それをしなくても責任を問われるべきでないという主張なのです。

生きて死ぬ、自然の摂理、死の高齢化の大波はもうわれわれの足下をすくい始めています。「自然」とはそもそも「自然^{ホトノ}然^ニり」、しっかり生きて、そして最期に自然に従ってこれによかったと思いたいものです。
(2016年12月 石飛 幸三)

参加費
無料

申込不要

当日直接
ご来場ください。



平成 29年 11月26日(日)

開場 12:30 講演 13:30~15:30

くれ絆ホール

呉市中央4丁目1番6号(呉市役所内) ☎ 0823-25-0306